

興味深い資料の数々

『相馬御風宛書簡Ⅳ』の出版にあたって

金子 善八郎

一、

糸魚川歴史民俗資料館（相馬御風記念館）は、平成十年から所蔵する著名人の相馬御風宛書簡を解説出版する事業をはじめ、すでに第一集を二〇〇二年、第二集を二〇〇六年、第三集を二〇〇九年に出版している。そしてこの度、『相馬御風宛書簡Ⅳ―学者・研究者・政治家・軍人・実業家の書簡―』を出版した。

この第四集は、御風宛書簡六九一人の封書四二三通、葉書二六八葉を収録している。収録されている書簡の著名人は、軍人では山本五十六、多田駿、建川美次など、学者では本間久雄、五十嵐力、政治・経済人では尾崎行輝、石橋湛山、高碇達之介など、その他山崎良平などと、多彩な顔ぶれである。

第四集の構成は、解説「戦争時代の御風」、書簡、書簡の解説、書簡目録で、上製本カバー付、七五九頁、頒布価格は五千円、資料館で販売している。

すでに巻の「解説」で述べたことではあるが、ここで改めて軍人の書簡、山本、多田、建川の御風宛書簡を紹介

することにします。

二、

御風はその著書で、山本五十六元帥の書簡を一〇通所蔵している、と書いているが、現在、館が所蔵している御風宛山本五十六書簡は八通である（一通は渡辺慶一に贈られたが詳細は不明）。発信時期は、昭和十七年（一九四二）五月から、昭和十八年三月まで、封書毛筆で書かれている。いずれも「検閲済」の軍事郵便、消印も、発信地・住所の記述のないものである。

二人の交信のきっかけは、昭和十七年、山本と海軍兵学校同期の和波豊一海軍中将が、講演の途中糸魚川の御風宅を訪問した時、御風は、御風宅で撮った二人の写真に添えて「山本提督の写真に題す」という詩を山本に贈ったことによる。

以後、御風は自著『良寛を語る』（昭和十六年十二月・博文館）、『丘に立ちて』（昭和十七年三月・人文書院）、『歌話』（昭和十七年十二月・輝文堂書房）などを贈り、「野を歩む者」を発行ごとに六十二号、六十三号、六十四号と贈っている。山本の書簡はその「返信」である。

昭和十七年十二月の書簡には、贈られた著書、雑誌の感想が述べられている。「貴著拝読中良寛禪師の御歌中小

生の心胆をさすもの有之」といって良寛の次の歌が書き止められている。

指おりてうち数ふれハなき友のか
ぞへがたくもなりニける哉

なおこの歌は、戦闘に臨む将兵の間でよく口ずさまれたという（『昭和史』・半藤一利・二〇〇九・六・平凡社）。

また、昭和十八年二月の書簡には「昭和十八年二月初 椰子の木陰にて山本五十六」とある。元帥の所在は厳しく秘匿されていたというが、この頃南方へ移動したことを示していて興味深い。米軍は、日本軍の暗号を解読し、山本の搭乗機を待ちかまえていて集中攻撃して撃墜した、というのが戦史の記すところである。

また、その後単行本になった『雪中佳日』（昭和十八年五月・桜井書店）によると、山本は、御風宛書簡に次のように書いているのも大変に興味深い記述である。

緒戦の戦果もまだ大勢を決するには遠く、戦ひは全く今後に繋る次第に有之

周知のように山本は、日米開戦には反対だった。しかし、開戦が決定されてからは緒戦で戦果を挙げて、早期に講和に持ち込んで戦争を終結させたい、という考えだったという。そのために真珠湾奇襲の作戦を立案、実践したという。「緒戦の戦果もまだ大勢を決す

るには遠く」という表現に山本の作戦通りに行かなかった苦渋のあとが示されているようである。

昭和十八年（一九四三）、山本の戦死が公表されたとき、御風は「ああ山本五十六元帥」や「ああ山本元帥」など、山本の戦死を悼み国民を鼓舞するたくさんの歌を詠み詩を作った。

三、

軍人の御風宛書簡で、最も数が多いのは多田駿の書簡である。封書八九通、葉書三葉。それに、妻睦の書簡も十数通ある。

多田は東京参謀本部次長、陸軍大学校長、第十一師団長（香川）満州国牡丹江掖河守備隊部隊長を歴任した著名な軍人である。

御風との交信は、昭和十二年（一九三七）十一月、

小生事以前より貴方様の著書二依り教へらるゝ処多く又良寛上人を知り之を尊ぶに至りしも貴著の御蔭に御座候

といって「迷悟庵」という御風宅の扁額の写真を乞うたことにより始まる。

多田はこの前年、中将に昇進して東京参謀本部次長になり、翌年一月十五日の「大本営連絡会議」で、蒋介石との和平交渉継続を唱え、日中戦争不拡大論者と目されたという。